

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)  
昭和二十一年十一月廿日印刷納本昭和二十一年十二月一日發行

第十二卷 第七號

# 浄土

十二月號

池の水

人のこゝろに似たりけり

にこりすむこと

さためなければ

(法然上人)



法然上人鑽仰會發行

# 信仰と生活

中村 辨康

— 信 —  
 禪勝房と云ふ人の質問に答へられた法然上人の御言葉に次のやうながあります。

ルuterの宗教革明に先立つこと四百年、我國の貴族的であつた宗教を一般庶民の手に渡し、しかも特殊の宗教行事でなければ信仰でないと考へて居た誤りを打ち破つて、むしろ信仰は生活にあるのであり、平生にあるのであると喝破されたのが法然上人でありました。

「衣食住の三は念佛の助業なり。これすなはち自身安穩にして念佛往生をとげんが爲には何事もみな念佛の助業なり。三途へ歸へるべき事をする身をだにも捨てがたければ顧み育むぞかし。まして往生程の大事を勵みて念佛申さん身をば、いかにもく育み助くべし。もし念佛の助業と思はずして身を貪求するは三惡道の業となる。極樂往生の念佛申さんがために自身を貪求するは往生の業となるべきなり。萬事かくの如し」

茲に言ふ「念佛」とは「信仰に依て念佛すること」であります。謂る空念佛ではなくして心から念佛することであり、

信仰することであります。信仰すると云つてもお寺詣や神詣することではなく、また御祈禱したり寄進にいたりすることではなく、自分の魂に對する解決をなすべく如來様の本願に委せ切ること、言ひ換へれば本願を信じ切ることであります。如來様の本願は天地の大生命に順應することを「南無阿彌陀佛」と云ふ形式で表現したものでありますが、それは阿彌陀即ち限りなき壽に自分の小さな命を委せ切る心を言葉で現はすとき「南無阿彌陀佛」と云ふのを漢字に翻譯すれば「歸命無量壽覺」となるものであります。

また「往生」とは「往き生きる」とかいてあるやうに、理想の境地に突き進むことでもあります。然るに永い封建時代に一般庶民は押さへつけられて進展を許されませんでしたから、宗教上の信仰もまた人々の精神の進展するやうなことは許されませんでしたから「現在は仕方がないが未來では」と云ふところとならしめて「往生」とは即ち「死ぬこと」のやうにさへ思はせられるに到つたのであります。

それ故信仰は生活には關係なく「死んでからのちのこと」であり「今のことではない」と考へられるに到つたのであります。

然も私達の生活は多くは經濟中心で、謂ゆる「三塗」の生活をして居るのであります。即ち、三塗とは塗炭の苦みを三通りに分けたもので、刀で切られるやうにつらい苦みとか、血塗られるやうな痛い苦みとか、火でやかれるやうなやる瀬ない苦みとか云ふ三つで、つまりは生活苦の代表的なそれも

經濟中心から結果するところの苦みであります。

その生活苦を招くことにさへ一生懸命になつて我身を貪求して居るのですから、まして自分の魂の解決の爲ならば一層我身を貪求しなければならぬ筈ですのに、多くの人々は經濟の方が忙がしくて魂の問題の方はツイなほざりにして居るわけであります。こんなことでは本當に人生を愛する所以ではないと存じます。

現在のやうなインフレ状態では「衣食住は念佛の助業」ところか「信仰は衣食住の助業」とさへなつて居る有様です。イヤ寧ろ信仰の方はそつちのけになつて居る状態です。それでは何の人生ぞやと云ひたいです。

信仰は魂の解決ですし、生活は單にこのからだの五十年の存續に過ぎません。この五十年の存續のことにはのみあくせくして魂の問題を捨て、しまつては切角の五十年が臺なしになつてしまいます。何の爲の人生生活かわかりません。

信仰と生活とが一枚になつてこそ本當の生活ではないでせうか。生活が生活の爲の生活ならばむしろ「生れざりせば」の歎聲さへ起ることとせう。

「此身今生に度せずんば何れの生に向つてか此身を度せん」と云ふ言葉があります。此の身を得て居る此時此際本氣になつて魂の問題を解決しなければ解決することが出来ません。

「一度人身を失ひつれば萬劫にもかへらず。盛んなる色の止らざること馳る馬の如し」とも云つて居ります。振りかへつて見れば五十年や六十年は東の間です。終戦になつたのもツ

イ昨日のやうですが、もう第二春を迎へて仕まひました。

此時此際、思ひ立つたのが吉日です。是非共、魂の問題を解決させよう。それには現在のあきたらない精神状態を一轉回させねばなりません。言ひ換へればこゝろをして「往生」させなければなりません。しかもその目標を阿彌陀の世界、理想の世界、苦あることなき極樂の世界に置くべきであります。

その方法として道德の實踐とか理智の開明とか色々ありますけれども中々容易ではありませんから、阿彌陀を念する「南無阿彌陀佛」の念佛にしかないのです。これが一番手取り早い方法であります。

法然上人は「一念に一度の往生を當て置き給へる願なれば念々毎に往生す」と言つておられます。然かも念佛に身口意の三業に通じますけれども、別しては口と意とにあります。無論意だけでもよいのですけれども、それでは外に現れませんからツイなほざりになり勝です。それ故どうしても口か身體かに現はさなければなりません。然し身體では簡單に行きません。言葉で意を表現するのが一番樂でもあり、一番適切でもありますから、法然上人も口稱の南無阿彌陀佛をすゝめて居られるのであります。

それ故この御法語は生活を「衣食住」の爲の生活とせず、念佛生活の爲の衣食住と心得べきことを言つて居られるのであります。即ち念佛生活の爲に求める衣食住ならば本當だが唯だ單に衣食住の爲に求める衣食住ならばそれは苦しみを増すだけであつて本當の生活にはならぬと言はれたのであります

# 路 直 正

## 本 多 綱 祐

今の時勢では「正直はだめだ正直にしてゐると馬鹿を見る」といはれてゐます。これは正直が行はれない世の中だといふことです。われわれは小さい時から、正直が世渡りの道であつて必ず守るやうにと教へられて来たのであります。それが今では新らしい日本に立直るまぎはに、昔のまゝではだめだといふ所から、正直ばかりでは間に合はないと正直を輕視することになつたのでせうけれども、正直は「一生の寶」といはれ、日本道徳の基礎となつて居るのですから、簡単に値打がないやうに思ひ去ることは、自分の寶を捨てることになると思ひます。

「正直貧乏横著榮耀」といふ有様で、正直はふみつぶされ、横著ばかりがはばをきかしてゐる爲に至る所で苦痛の叫びをあげるに至つたと思ふのであります。

考へて見ますと、われわれには生れながらに正直と横著との両面を持つて居るやうです。普通家庭でも正直を教へながら、一面では正直は馬鹿と並んでるやうに思はれて居り、横著は困るといひながら、うまくやつたとか、はしつこひとかいはれ、よくはないが世渡りには仕方がないやうに思はれてゐます。この固有の本色が、終戦後に至つてなまなましく世の中へ出て、正直より横著の方が露骨になつて来たものと思ふのであります。

われわれが人とつきあふのに、正直者とは安心して明るい氣持でゆつたりしてつきあへますが、横著者に對します時は安心は出來ずすきのないつきあひになりました。話すのにも用心しなくてはなり

ません。どこか苦しきがあるものです。正直には明るい天地が開け、横著にはいかにも見へ透いた、其時かぎりの安つばさが眼立ちます。正直には正しさなほさがあり、横著には邪しきさがあります。これを更に深く考へてみますと、正直には佛教でいふ菩提に通ずる樂の道があり、横著には煩惱の闇に入る苦の道があるやうです。昔の人は「正直に依るが故に一切衆生を憐愍する心を生ず」といひましたが、なる程横著では人を憐れむ心は起りません。救ひは正直の一道から生れるのであると思ひます。つまり正直は菩提の一面で善であり、横著は煩惱の一面で悪でありますから、正直の頭に神宿るといはれますやうに、正直には神も佛も離れませんが、横著には神も佛も離れてしまひます。

然しながら神や佛の御心は決して横著者をお捨てにはなりません。たゞ横著な心が神から佛から離れてしまふのです。よく神や佛に見離されると申しますが、本當は神佛の慈悲からもれる者はありませんし、却て横著者程御心配をおかけになつて居るのです。人間

の親が不孝な子程よけいに心配しますやうに  
普通なら必ず見捨てるにきまつてる者でも、

慈悲の御心は決してお見捨てにはならないの  
です。何時でも何處でもそれこそはらはらし  
ながら、われわれのあぶない世渡りをわけへ  
だてなく御心配してくださるのです。それを  
大慈大悲と申すのであります。

今われわれは戦敗者である爲に、たまたま  
横著の一面が強く出たといつて悲觀してはい  
けません。頭次第で神でも佛でも宿つて頂け  
るのです。たゞ横著に平氣であつては困りま

すが、進んで神佛の宿れるやうな正直な頭を  
持つやうにすればよいのです。

今ま世の中が暮しくいのは、横著が大手  
を振つて行はれる爲ですが、その横著は何處  
の誰がといふのではなく、各人が揃ひも揃つ

て横著にかまへて、人をかきのけたり突き飛  
ばしたりし合つて居りますから、どうして住  
みよい世の中になりませう。このままで行け  
ば恐ろしい地獄みたいな有様がつづくばかり  
だと思ひます。

われわれは今行はれてゐる各方面の争ひ

を人事とは思はれず、争ひの本源は自分も持  
つて居る人間の本體の一面から出て來て居る

ものと認めて他を責めるよりも先づ自分を省  
みるのが本當であり、且つ他と争はないもう  
一つの本體の一面をもつと明らかにして行く  
ことが大切だと思ひます。われわれの心の中

の煩惱をかき亂すやうな争ひ事に熱中するよ  
りも、同じ心の中の菩提を増上させる方向へ  
轉せしむるのが、最も善良な態度であります  
かくてこそ生活不安を除くことが出來ると信  
ずるのであります。

菩提心の増上は自分一人の明るさをとりも  
どすばかりでなく、他人の心迄明るく致しま

す。一人でひそかに楽しむのでなく誰とでも共  
に楽しめるからです。しかも増上の一路をた

どる時その樂みはつきることはありません。  
進むにつれて益々深くなるものです。そして  
いくら樂んでも決して飽きは來ないのです。  
われわれは横著で苦んだあげく、よく神佛  
を念じます。それは時々悪から眼をさまして  
神佛にすがらうとするのでありまして、煩惱

の闇の苦みから菩提の明るい樂みにもどつて

來ずには居られなくなるからです。つまりわ  
れわれの本性がさうさせるので、有限の人間

生活が行きつまずきますと、無限の境地の風光  
をあこがれるに至るものであります。  
われわれは戦時中軍や官僚にいはれながら  
も、齒をくひしばつて苦しい働きをつづけ  
て居たのです。今は軍も官僚も引き下り、わ

れわれの手で國家をもり立てることになつた  
のです。今こそ本當に齒をくひしばつて働か  
なければなりません。命令で無理に動かされ  
たのとは違つて、全く自分の仕事の爲に働く

のです。ですからわれわれの考へた國家を作  
り上げる一人として、任務の重大さを感じ、  
横著なこゝろを脱し専ら正直の一路を進んで  
重任を全ふする外に道はないと思ひます。

それでお互にこれまでの横著心を捨てて正  
直にかへることが、現下の國難を克服する第  
一步であり、また自分の苦痛を遠ざける手近  
かな方法でもあります。或は單に正直といひ  
ますと、あまり簡単なやうに思はれませうが  
つまりは無益な右往左往は止めて、眞正直に  
自分に與へられた仕事に飛び込んで骨身を惜  
まず働くことであります。

# お地蔵さまが牛を買った話

水野遊粹

これは伊太利の「五夜物語」の中に出て来るお話です。

正直な父子の牛賣りが居りました。息子のトンコーは馬鹿でした。が働らきものでしたから世間でも可愛がられました。

「さア、トンコー、今日は牛を賣つてくるだよ、だが市場へ行つてもお喋りする者を相手にしてはいけないよ」と、父親はよくいきかせてトンコーに牛を一頭ひかしてやりました。市場へ来るとどの買手もみなお喋りです。でトンコーは誰ひとり賣る相手がみつかりません。結局誰にも賣らずに歸つて来る途に、ふるぼけた地蔵堂があつて、たふといお地蔵さまが立つてゐらつしやいました。

「お地蔵さまに牛を賣らう」と、トンコーはお地蔵さまに向つて「お地蔵さま牛を買つて下さいませ、もしお地蔵さま、もしく地蔵さまへ……」といふましたが、地蔵さまは黙つてゐます。「もしく地蔵さま、ウンとお安くしますよ、買ひませんか、もし



地蔵さま何とかおつしやいませんかネ」

地蔵さまは黙つて何の返辭もしませぬ。さつきから一人の泥棒が地蔵さまの後ろにしがんで居りましたが、ニタツと笑ふと

「ようし、その牛買った、だがお金は、明日の朝まで待つてもらいたい」といふました。

トンコーは、さては地蔵さまの言葉たとおもつて、「え、よろしいとも、では牛をこゝにおいて明日の朝、お金をいた

ゞきにまいますから」といつて、牛を地蔵堂の柱につないで歸つて來ました。

父親はトンコーを叱りとばしました。

朝、トンコーは地蔵堂に來ると、牛の姿が見へません。地蔵さまに、代價の請求をしましたが、地蔵さまは黙つて居ります。

馬鹿のトンコーは腹を立て、石を拾ふといきなり地蔵さまを叩きました。木像の地蔵さまは二つに割れてしまひました。すると地蔵さまの腹の中から燦然と光つた金貨がザクザク出ました。

大方泥棒がかくしておいたものでせう。だがトンコーは、牛の代價を地蔵さまが拂つてくれたものとおもつて金貨をもつて歸りました。

「阿父さま、地蔵さまが、牛の代價を拂つてくれたよ」と、まじめにいつて金貨を差出しました。父親は、息子と金貨をみくらべて「不思議なことがあるものはあるものだなあ」と、つぶやきました。

# 宇宙の本體と阿彌陀佛

擔當 中村 辨 康

(問)

毎號の御説明有難く拜見  
させて頂いて居りますが

この現象界の實相のことです。  
即ち現象そのままの相のことです

阿彌陀佛とは宇宙の本體眞如を神  
格的に説かれたものではないませ

即ち法性が動き出して居る相貌の  
ことです。而して法性とは「生き

んてせうか。然し眞如には大悲救  
濟の意志があるとは信じられませ

る力」のことです。眞如法性と一  
口に申しますが、眞如は動かない

ん。法藏菩薩の五兆願行などはや  
はり神話ではありませんか。阿彌

やうですが、法性ならば動くやう  
に思はれませう。眞如など云ふ言

陀佛とは釋尊が自分のことを仰せ  
られたのではありませんか。その

葉は兎角誤まれ易いのです。起信論  
などの弊害でせう。同じことでも

點御説明を願ひます。

眞如縁起を論ずるよりも法性性起  
を考へた方が積極性に富んで居り

(答)

宇宙に本體と云ふものが  
あるのでせうか。あると

すれば眞如と云ふものらしいです  
が、あなたはそれをお信じになつ

意志であります。それは生きん  
とする性であり、生かさんとする

「そのとほり」と云ふことで「實  
相」のことです。實在の事ではあ

をこそ救濟意志と見るのです。さ  
う見えないと仰せらるれば水掛論

りません。實相とは私達の見て居

やうな意志のみが意志であると限

定しなくてもいゝではありません  
か。

次に法藏菩薩の五兆願行は神話  
であらうとお話は何う云ふお考

へで云つて居られるか分りませ  
んが、お話の内容から見ても神話で

ないことは明瞭です。あなたは事  
實談でないから、神話であるとの

断定を下されたのではありませ  
んか。假に今此處に研究の結果に依

る推定の御話があるとしてあなた  
は之を神話として片づけますか。

私はさうは考へません。あるべく  
してあることあつたことゝはそれ

が事實談であらうと無からうと、  
價値に於て變りはありません。若

しさうでないならば理學の發達は  
ありませんし、發明などは夢物語

になつてしまふでせう。  
次に阿彌陀佛は釋尊自身のこと

を云つたものと云ふ考へは昔にも  
ありました。何かそんな偽經があ

りました。經題は忘れましたが、  
「久遠實成阿彌陀佛とは我れ釋迦

牟尼佛のことなり」と云ふ文句が  
あつたと記憶して居ります。大體

久遠實成などと云ふ考へ方が間違  
つて居ります。法華經の向ふを張

つたつもりでも實は法華經に追隨  
したもので卑怯です。但し阿彌陀

佛は釋尊の信念表現と見てもよい  
でせう。然し御自分のことではな

いと思ひます。然し原始佛教にこ  
れ程發達したものがあつたでせう

か。頗る疑問ですね。かう云つた  
ら或る一部から叱られるかも知

れませんが……。

## 編集室より

未曾有の紙ききんのため、減頁  
をいたしました。誠に申譯けあり  
ませんが、萬止む得ざる措置で御  
諒承を願ひます。しかし近いうち  
に再び舊に復させるつもりです。  
鋭意努力していただきますから、暫くの  
間御辛棒願ひます。

會員の投稿をつ  
ります

# 會員の頁

「浄土」誌第十二卷第一號より四號まで一括受領致しました。厚く御禮申し上げます。飢渴せる心に與へられた糧の味たるや筆舌に盡し得ないところです。失禮な申し様かも存じませんが、戦前の浄土誌よりも内容の充實してゐる點は他の同類の刊行物或は大衆雑誌の戦前に比べて見落りのするのに比べてほつとした氣持です。殊に吉田絃二郎先生の寄稿は浄土の強みであり、出来るなら先生の御健康を御祈りして將來本誌の顧問として藝術的に香高く又藝術的理想と宗教的眞理の渾融せる浄土の開顯に御援助を頂き度いものと存じて居ります。

次に信仰相談の浄土の存在の眞實なるや否やの問題は論ずるも馬鹿らしい感じも致しますが、信仰相談としてこれだけの解答を與へねばならぬ義務を感じて御面倒な御心勞を中村先生におたのみ致す我浄土誌の因縁として有難く拜讀致しました。而し浄土は、一つの見方でありませぬ。神の國ユートピア（理想國）郷も又一つの見方でありませぬ。確に眞實に存在すると

思ひます否思慮するにあらず、信念の上に眞實存在するのです。即ち存在すると、私は念はせて頂いて居ります。法然上人の一枚起請文に於けるあの自信たつぷりな信念の力より外には浄土はないのです。確かにあの信念の上にか下に中村先生のおつしやる唯だの存在ではなく時間的變化だといふ哲學的解釋では、むしろ學問としてでなく宗教的情操を培ふ上に於てはいささか固苦しいところもあるやうですが、何しろ阿彌陀佛の存在にしても存在の道理を分からうとするのは、智慧を磨くのと智慧を増すのとの相違を辨へぬ無駄足を踏む智慧のない不經濟な非能率的な非文化的な信仰でせう。むしろ道理を捨てゝかゝり度い。道理を捨てゝかゝることの出来ない人にどうして自分を捨てゝかゝることができませうか。私は師範在學中に三度位木津無庵師の佛教講演をききました。家が神道であるため今まで佛の慈悲を望みながら思ふやうにならず病氣になつてからいくらか佛壇もなく何もないところまで法然上人に私淑してゐます。私自身がどうしても道理をわからうとばかり心焦つて道理を捨て切れなないので。道理なるものが既に自分即ち自我から出たものではないかと思考するのですが、どうか中村先生その他の先生方の御指導を頂き度いと存じます。無理に卑く賤しめて説かねば一文不知の者に分らぬからといつて申譯けるのもいけません。ぬがそこは自由自在に一つ平民的にお教へ下さい。

浄土の表誌に法然上人の一枚起請文の全文を毎號印刷することは出来ないものでせうか。そして全文の解説をお願い致し度いのです。あの一枚起請文に横溢せる法然上人の不動の力を如實にこの現代の宗教界に顯現して頂けないものでせうか。先づ何よりも力です。あの力に押される心地よさを味ひ度いもの。

第一號の會報にお示し下さいましたやうに批評とか注文とか感想とかを寄せるとの御言葉にあまへまして遠慮なく不首尾な文句を並べましたが、之は決して注文でも批評でもなく私一個の信仰の程度を計量して頂かうと思つて書いたのです。未だ不信にして計るだけの信仰も持ち合はせて居ないので計つてくれとは無理な失禮な申し様ですが、先生方の御奮闘に對し一言御挨拶を申さねば氣がすまぬ程有難いのだと御解釋下さい。

（鹿兒島・谷山忠謙）

「浄土」 十二月號

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

昭和廿一年十一月二十日印刷

昭和廿一年十二月一日發行

（定價一圓六十錢）

東京都芝區芝公園浄土宗務所

編集兼 眞野正順 發行人

東京都神田區神保町三ノ一〇 印刷人 春山治部左衛門

東京都神田區神保町三ノ一〇 印刷所 共立社印刷所

配給元 東京都神田區淡路町二ノ九

日本出版配給株式會社

發行所 法然上人鑽仰會

東京都芝區芝公園浄土宗務所

振替東京 八二一八七番

會員番號 B-108014

會費 金 二十圓 一ケ年

（送料共）

振替拂込みはすべて三十錢増のこと

定價金一圓六十錢（送料十五錢）

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）  
昭和二十一年十一月廿日印刷納本 昭和二十一年十二月一日發行

浄土 第十二卷 第七號